Book Review 28-4 SF ＃独裁者の学校

『＃独裁者の学校』（エーリヒ・ケストナー著）を読んでみた。
著者はドイツの詩人で作家。『エーミールと探偵たち』（1929 年）等、児童小説を執筆した。

本書は、ナチス時代を生き抜いた著者によるナチスへの皮肉となる戯曲作品である。「独裁者の学校」とは、暗殺された大統領の替え玉を養成する機関である。次々と独裁者を入れ替えていく黒幕たち。現ロシアのプーチンも影武者ではないかという噂もあるが・・・。
本書から、どうせ誰がやっても公平や正義は庶民と無関係と読み取るのか。2024 年 7 月 7 日、学歴詐称し（結婚式での花嫁への賛辞でもあるまい）、不動産会社と結託して神宮の森を抹消しようとする女帝に、日本の首都東京が 12 年間託されることになった。
ある読者は、「どんな権力も腐敗するので特定の政治家に過剰な期待をせずに淡々と政権交代を繰り返すのが良い」と読み取るべきであると主張している。

独裁者の寓話で『#短くて恐ろしいフィルの時代』（ジョージ・ソーンダーズ著）を同時期に読んだ。著者は、米国の小説家、児童書作家、エッセイストである。シラキュース大学教授。彼の作品は数々の有名雑誌に掲載された。

人（モノ）が 1 人しか住めない内ホーナー国とその外にある外ホーナー国の寓話。様々な格好をした機械のようなモノが住む国の話。内ホーナー国住民は 7 人、外ホーナー国は 14 人、大ケラー国は 9 人。それぞれの国土は限りなく狭いか、十分か、または限りなく幅が狭い。少数者を「国家共通の敵」とすることによる独裁政権（フィル）が登場する。無能な前大統領から権力を奪い、自分に無制限の権力を移譲するように策略を巡らし、独裁政権がもたらされるという寓話である。長閑な国にモンスター・フィルが出現することで、約一週間という速さで内ホーナー国と外ホーナー国の破滅に進んでゆく。まるでロシアのウクライナ侵攻のように。著者はナチスのヒットラーを思い描いていたようだが・・・。

まるで現在の日本を（米国を）映し出しているように私には思えるのだが。傲慢な為政者もそれを選択する従順な庶民さえも。